使用能面、面箱解説

翁（白式尉）　作者不詳　室町時代

杉本博司コレクション（公益財団法人 小田原文化財団蔵）

〈翁〉は中世から能の太夫家が大切に伝えてきた神聖な曲。「翁面」はその〈翁〉の専用面として用いられてきたものである。神々しい老人の姿の表象で、白く彩式されたその容貌から「白式尉」とも呼ばれている。

下顎の部分が、紐で吊り下げられた切顎になっており、可動式になったその口元から、神が観賞者に語り掛けてくるかのように見える。笑みをたたえた柔和な表情の中に堂々とした風格をも備えた面で、両目尻の皺は額の皺と頬の皺にそのまま繋がり、皺の織り成す渦文様が顔全体を温かく包み込んでいる。

本作は、室町時代後期から現代に至るまで、大切に伝えられてきた貴重な翁面である。

葡萄蒔絵翁面箱　安土桃山時代

杉本博司コレクション（公益財団法人 小田原文化財団蔵）

〈翁〉の上演にあたり、「翁面」を納めて舞台に運び出されるのが翁面箱である。御神体である面を納める性格上、美しい蒔絵が施されたものが多いが、この翁面箱には蒔絵として、葡萄文様が用いられている。絵画的な自由さを失わないその意匠化は、実に見事である。

葡萄は実が多くつくということから豊穣のシンボルともされ、子孫繁栄を願う吉祥文様として古来より尊ばれてきたものである。

解説書編集　篠山能楽資料館

株式会社小田垣商店　本店

十件文化財改修完成記念祝賀能

令和七（二〇二五）年四月十三日

株式会社小田垣商店　本店

十件文化財改修完成記念祝賀能

令和七年四月十三日（日）

翁

（翁）大槻　文藏　（千歳）大槻　裕一
脇鼓　上田　航平
頭取　大倉伶士郎　笛　野口　亮
脇鼓　上田　敦史
稲本　幹汰
後見　赤松　禎友　地謡　山本　博通
武富　康之

使用能面　翁（白式尉）　室町時代　小田原文化財団蔵

仕舞　高砂

赤松　禎友　稲本　幹汰
地謡　山本　博通
武富　康之

〈曲目解説〉

能　翁

能の曲の中で最古の成立とされ、物語はなく、神事的な祝言曲である。謡と舞により「五穀豊穣」「天下泰平」「国土安穏」を祈願し、正月や祝賀に際して演じられる。舞台登場の前に演者一同が清めの儀式を行い、翁面の入った面箱を掲げて演者が現れ、太夫（シテ）が舞台上で面をつけて翁の神となることなど、独特の神聖な形式をもつ。面箱にあるのは、老人の笑顔を表し、白く彩色された「白式尉」という翁面である。また通常の能において小鼓は一挺であるが、ここでは三挺が用いられる。呪文のような祝祷歌にはじまり、「千歳ノ舞」が直面（能面をつけずに素顔で演じること）で颯爽と軽やかに舞われ、続いて荘重で厳粛な「翁ノ舞」が舞われる。

仕舞　高砂

仕舞は能一曲の中の一定の見どころを地謡により舞うもの。
〈高砂〉は祝言の曲で、立て板に水を流すようなテンポの速い〈神舞〉を舞う。爽快さと力強さに満ちた気品のある曲で、「相生の松」によせて夫婦愛と人の世を寿ぐものとして、古来より大切にされてきた。

使用能面解説

小面（こおもて）　是閑（ぜかん） 出目吉満（でめよしみつ）作　「天下一（てんかいち）是閑」焼印アリ　安土桃山時代

杉本博司コレクション（公益財団法人 小田原文化財団蔵）

「小面」は能面の中でも最も若い女性を表現する面で、「髪物（かずらもの）」と呼ばれる女性が主役の能、または精霊や天人が主役の能に用いられ、その名の「小」には可憐さや雅やかさなどの意味が込められている。

この小面の作者は安土桃山期随一の名工と誉れ高き、是閑 出目吉満で、文禄四年（一五九五）に豊臣秀吉から「天下一」の称号が与えられている。その表情からは、品格の上に優艶（ゆうえん）な雰囲気が漂い、能面美の一つの極致を感じることができる。

解説書編集　篠山能楽資料館

株式会社小田垣商店　本店

十件文化財改修完成記念祝賀能

令和七（二〇二五）年四月十三日

株式会社小田垣商店　本店

十件文化財改修完成記念祝賀能

令和七年四月十三日（日）

記念対談

大槻　文藏（能楽観世流シテ方・人間国宝・文化功労者）
杉本　博司（現代美術家・文化功労者・日本芸術院会員）
聞き手　中西　薫（篠山能楽資料館 館長）

（天女）大槻　文藏

羽衣（白龍）福王茂十郎

和合之舞

大鼓　山本　哲也　　太鼓　中田　弘美
小鼓　大倉伶士郎　　笛　野口　亮

後見　大槻　裕一　　稲本　幹汰
地謡　山本　博通
赤松　禎友
武富　康之

使用能面　小面　是閑作　　安土桃山時代　小田原文化財団蔵

仕舞　岩船

大槻　裕一　　稲本　幹汰
地謡　赤松　禎友
武富　康之

〈曲目解説〉

能　羽衣

のどかな春の朝、漁を終えた白龍（ワキ）が三保の松原へ帰ってきた。常ならぬ雰囲気を感じた白龍は、松の枝に掛けられた美しい衣を見つける。家宝にすべく手に取ったところ、天女（シテ）が現れて、それは自分の羽衣であり、それがなくては天に帰ることができないので返してほしい、と頼まれるが、白龍は返すことを拒む。

空の雲、鳥の声に天上界を思い出し、嘆き悲しむ天女を哀れんだ白龍は、舞いを見せてくれるならば羽衣を返すと告げる。しかし返せば舞わずに帰ってしまうのだろうと白龍は疑うが、人間の世に偽りはあっても、天上にはない、と天女に言われて恥じ入り、羽衣を渡す。

羽衣をまとった天女は、天上の美しさとともに三保の松原も讃えて歌い舞い、空に舞い上がり、数々の宝を降らしながら三保の松原からはるか富士の高嶺を越え、空へと消える。

仕舞　岩船

仕舞は能一曲の中の一定の見どころを地謡により舞うもの。

〈岩船〉は、龍神が宝を積んだ岩船を守護するために出現するというもので、ただひたすらめでたさを寿ぐ曲である。勇壮活発に舞う祝言曲として能会の締めくくりをすることも多い人気の作品である。